石門

心學道の話

六篇 中

サ
佐竹氏

心學道之話巻之中

此ころおかしき事の規矩にあらぬ事をちよつと咄ませう中まのせ人。是ハ近比ある。さる所でうけたまはりましたが或寺の上の米蔵に米が大造積である處。或日その所の仲背が多勢よつてその俵を外へ持出しましたまその蔵の入口所がすこし狭ふてある俵の中に別に一俵外へのぞき出て居る俵があつて。その俵が多勢の仲背の俵をならべた中の野干にあつてあらぬから。中に一人言ふとりや三十ばかりのちいさなの仲背が見て此俵ハ足下に野干がなるから見てのけるがよいといふと。仲間の者が皆

といふものが有て　イヤ〳〵それは定めて上の俵の猿出られ
工合ぢやが悪ふて用心のために袖へ一俵をかませてある
ゆへも知れぬが　マア〳〵外にあるやうもそのまゝ捨ぞ
は悪けといふと皆入ぞ。かの吉六が力にまかせてその俵を
引ぬきましたら忽ち其下の俵ばかりの俵がどつしと工合
にあつて居たのが一度にどつと崩れかゝりその吉六
は丸で下つぶし。俵の上へ数多く仕舞ましたが。か様な事も
私くは大義の替る所にはある事じやげにござりますが。
ちぢめ此吉六も仲間共のいふ事を聞ず入らざる腕立と
世話をやいたのは。何の是もなりのよせりのが何の足に

あるものゝ中には迂闊な者が力にまかせて抜く者へ
ツイそのまゝに悪い目に合ますぞ。扨それからは多勢の
仲間どもが何でも可愛がりてやらうとして。定めて腰は砕け
ひしげて居るであらうから一刻も早く上の俵を除て遣るが
よいといふてかの崩れた俵の上へ数十人の仲間が上てエイサ
〳〵で先俵を除て居るうち凡俵の百俵ばかりにも及ぶ時
フト見ますれば此下の俵の間にかの吉六が足の先が見へたれ
げなさうでや」吉六は次に居るぞといふて多勢よつてそこ
の俵を除てみれば吉六は丁度工合よく俵と俵の合掌する所に
あつく居るそのまゝ横になつて居て有りの足を出し

たゞしこゝろばかりで神仏の擁護もなく命も全く思ひ寄り助りゃしまいが。むしろ僕婢なぞするもあるとのじゃなぞ。前かたゞそ中にも大造な縁拗の事に及びて命を助かるものがあればぞ。此者共は僕婢と僕の間へ立合ふてみなさきまでつとめ一家の中にはたまたま命を助かりもしくが。是が正直の僕婢その人ものあるまじべ規則にはなりぬるすじや。是規則にして魂のかのがその中よりあふるゝまいといつでも鍛は碎て仕舞それじやまくつくてアノく　その中にすこしばかりもさはりあるを捨つのせんに精出して親まだ孝行し主人には忠義をし銘々の家業を大切に勤め世渡をも大切に守りてするを正直にしてするのが宝よんじや

さうしたうへでの貧富盛衰幸不幸はそりゃ皆銘々の生れ合にあることなれば此方の自由にはならうとてもならぬじゃ。そのうへ又命があつての幸福不幸はじやにあつても命に苦しみがなんぼう。たとひ夭死するものも生きて験がないといふもの。又命がなくてめつさう本性に長命するとその長命の果報で子ある孫までも曽孫までも死に後れて後まで世話の人にまで。イヤ死ぞこなひじやの娑婆ふさげじゃのといはれ色々悪口のその上に嫁がしかりて難儀な苦しみさせねばならぬ。それではいつまで活ても活る験はないわん

じやがいふさうなると人の長命も限があつてかくのある限があつての長命は長命なる程苦しみが増て来るから反て大きな不幸といふものじや。それに又人の身のうへからいつても命が長いの短いの過合じやの不過じやのといふけれども。かぎりのない天道様の眼からみるとてうど水の上へ浮んだ泡が大きかつたの小かつたの長かつたの短かつたのといつても同じ事で。夢の譫言といふものじや。惣じて此世界は無常変易が常となつて居る世界なればたとへ堯舜の如き聖徳があつてもたとへ千年万年の寿命を保つといふは此世に長い事が七十か八十年百年から見れば短き命それと一年三百六十五日でつもりてみると百歳まで生て居る日の数がたつた三万六千五百日なりなれどもその内が此年三十歳になる人ならもう一万六百五十日は引てあり五十才になる人ならもう万七千七百五十日はもう引てのけるといふその余りが残りはわづか二万日足らぬ一生。それも先百歳まで生る残りでのうじやがまして七八十才を一生とする人ならば残りの日の数はまだ万日に足らぬ不足の命じやがそのわづかの境界を。限を知らずにあくせくと苦んでめつたに死を忘れるようなは限を知て一日なりとも

今日を安楽（あんらく）に暮し活らるゝ命だけは活（いき）て楽（たの）しむが實（じつ）よいやうなけれは若い時分などは是から後（さき）の道中の余程長いやうなものなれどその身山坂まではいろ〱なるものもあらうにかくの如く此門へ入なされ本心の修行して後の活く天命といふものを知りなさるがよい。孔子様も朝に道を聞かば夕（ゆふべ）に死すとも可也と仰られて道を知れば活くも死ぬるもかまはぬ天命が知れるゆへなる事はなるならぬ事はならぬといふことを知によりいかなる変事が出来るかしれぬとひその中に手（そて）前で死ることも。思ひ詰ることもなく。そのうへ孝といふが手で定命（ぢやうみやう）をちゞめるやうなることもせ様ば。一代の道中（だうちう）が

随分（ずいぶん）無事に安楽で過らるゝ筈なれど。いろ〱なる事にかゝつらひ大切な天命の様（やう）を何でもないやうに果して仕舞。それで人は位が高ふてもひくふても。本心知らぬ様くの生れ合のあることをそつくりと本来空せ様ばならぬるドや。その又それ〲の生れ合な限のゆるゝことを今一ッたとへてはなしましやうならう。人の家の内にある佛檀といふものは何処（どこ）までも奇麗（きれい）にかざり立てゆるもので通頃までの佛檀などでみると内の張附は惣金張附までて中の上段までは結構な掛物もかけてある前の方までは結構な花活にいろ〱な花を活ます又真鍮（しんちう）の輪燈（りんとう）やら燭台の

ろうそく立やら香爐やら香盒やらそこらへ結構な佛具を彼へならべ常に名香の香りをたやさぬやうにまするゆゑ。誰でもその家へ行と天窓をかゞめずやならぬやうな位の高い處のやうで。是を人の身にたとへていふて見るとてうど（マア）上々極上の御普請しつらひ又ハかくで。いかい物入し金銀も散財も使ふのあだげ持てなる分限者の内と見るやうなものじや。又同し一軒の家の内にいつても同じやうに一方ハ奥居間のやうなもので是より下の穢しいものハおかぬといふ譯にハゆかぬ。なぞといへバそりや尾籠な事じやが雪隠じやが是も人の家には一日もなくてならぬ大切なもので御座るものなれど奥の佛檀にくらべて見ると。それは〳〵格の穢しい汚穢ハあだ此やうな席でもやはり無くてはならぬ程のものじやが是を人の身にたとへていふて見るとそれハ錢の一文惜まふの欲心人その日かせぎの薄きものを見るやうなものじや。故その心つかひのうへの人の貴賤上下を論じて見ると。佛檀ハ書院そのやうに途方もなく遠ふじやが一軒の家の内にいつても今日用を達し人と曲ける處の徳と論ずれバその徳にいたつては貴賤上下の差別ハなし。そうじやらなせといつても何ぞ肉食不志し事でもが

どうぞ旦那寺の和尚を請待（しやうだい）し経でも讀でもらふと
いふ時位牌（いはい）でもかざつてある佛壇（ぶつだん）でもかけてあるならん。
それやこれにしても禮儀でなければならぬその
時はなんでも御馳走がその中に斎飯（さいはん）をあつらへて
どうでもこうでもそのまゝへは出會れもせずなんぼうそれ
からその御馳走するもあるまい様で懐中菓子（くわし）やら御膳（ぜん）
やら色々の御料理（れうり）を出してその和尚をもてなされます
和尚も御馳走（ちそう）の上分もよくしてその御料理もあつてうれ合點（しやう）
ありがたい御馳走してゆかる内にもかのお坊がめぐつて来ると
コリヤ ちくと庵室なる小僧どもが中にかの下へ行きなさら

あるのじや。それなると次の間へ立て袈裟（けさ）を
はづし衣（ころも）を脱（ぬぎ）かへてあちらこちらを見廻して
ゆるりと亭主見附て モシ どなたぞござりませぬかと
いふと ハイ ちくと用事に来りしと御ざりしといふそのさん
あゝ何ぞ御案内申せといふ時。諸方かしこ気の利（きゝ）ぬ男が
出て ハイ どなたの御用ですかと言て それで御ざり
ますといふて私向へも往まして挨拶（ろ）もしてさんがよんだ
いう和尚でも拝（をが）をもいたして イヤ 拙僧が参りましたらあれ
ばでんわざるぬ此中から結構な御馳走を今ほどの事にて
ものがでとふで閑場へは案内申されといふてふちがひ

ハあかん　サア　その時にハそんな結構な金張附の佛檀があつても唐木作(からきづくり)の数寄屋(すきや)があつても其なかへ金ぬらし雑宿(ざこね)するも勿体ないとも知りもせねで尻尾をすぼめてウロ〳〵迷ハねばならぬにちがひハないが、その内によいしあんで来てモウ〳〵たまらぬゆゑ出て来るときようする良しに底く飛り裏の方を見出して下雪隠(せつちん)でも見付らましうらつその時の歓(よろこ)びハぜんたいをので、いふやうもなく難有やそ其内へ駈込ますることがひハなりますまい。それから肉で用を達して今迄の苦患(くげん)を遁(のが)れ大安楽を得らるゝしハそりや今〳〵雪隠の冥徳なるぞが中ついそりや雪隠なる接(えう)

苦與楽(くよらく)の大功徳(くどく)ハそなへてあるといふものなれバ其徳に於てハ何も珍しいのきれいのといふことハあれものじやから。雪隠もその天に受てある雪隠の徳を亡(うしな)ハず入来る人を日々助けて居る人もそれがそれでそのまゝ仰(あふい)で天に愧ず俯(ふし)て人に愧ずといふものので。せつちんの不違ひハないわいの。その雪隠めが天命の所を知らぬと、その和せつちん徳のあるを知らぬもおかしく弘權後の方を見て来てハ浦山しがりじやて弘權後ハ結構なものじや。肉の住處ハ並金張附にして床(とこ)まへいふても結構な掛物もかけてある真鍮(しんちう)の花活(そうのけ)中に鶴亀のろうそく

念仏講じやの打鉦じやのと頭ふる人の内でハみんな
てもあの仏やうな居具てあるべし。座に香のかほりを嗅で
仏一つ尻目でのあの仏やうな顔をして待てゐる人々立寄
人が其時灯明にむかうてまるとかゞめて額ハあるがそれからん
まだ此方のうちらハ済ましたものじや間じ妄想のもので
ありがたい年中人に立て附られ。座に不浄を入られまして
不浄なくと嫌ひましる。それにまして渡器じやの渡銭じや
のといへものハ此方の別家のその者どもそれハ反つく
敷かくハよくの此居食へも居まるとゐらるゝ事
しやが此方ハそれもその中うかゝるゆかりある事も

かみかば アヽ済ましたものじやとて生涯の思ひ出
に仏檀の中を荘厳しを仕てもよかろと思ふ仏居
めの花を活ふる香を焚くる古徳の鐘鉦又鶴亀の燭台立
金の御仏器に金襴の打敷とならべてつくづく見せてまへが根
が本源のことじやによつてとてもそこ〳〵仏縁掛るもの
あけて待ば。皆くまへをかゞめて皆やうちものもありませぬ
がさいべといつてそのやうな不浄金襴の打敷おく
てある家ハいかふえらんで珍しやといつても用るのの違
しらまつるものである。さうしてそれが即ち本願と
仏壇の附属者でどちらも徳も亡あみる機の世界のじやま

ものゝ叩(たゝ)きつぶしてしまふよりほかはない。人がさうぢや。そのやうなものでおそれながら上は天子将軍様から下万民にいたるまで皆それ〳〵の天の命令(いひつけ)あれども所でも只その身〳〵の生れ合を大切に天命じやと心得てじんぼつとむるがあるべきとめつて手をもがき苦しまれ。只その變(へん)をおそろしく思ふてゐるがいかぬ。さて〳〵〳〵おれが又もし天命がいつて時節が来ると夕顔(ゆふがほ)が瓠(ひさご)になるもありまた茄子(なすび)のかはりが泥鰌(どぢやう)になるもあり子子(ぼうふり)が蚊(か)になり芋虫(いもむし)が蝶になるやうな天命もあるものじや。それがやつぱり順(じゆん)なして其(その)変(へん)を変といふものじや。それ小

その天命を知らぬ凡夫はいつでも此世界は我がまゝなるものゝやうにおもふからわが渡世の家業や職分をよくふ精をあそばしてめつたに無性に色男しようへの出世しようの金をもうけ楽になろうとものとおもふて苦しむが是を知て聖賢(せいけん)の御眼(おめ)からごらうじては嘆かはしきの毒なものゝ不思議でいらぬ。それと一ッ蛙(かわづ)をものゝふしぎとつくいふて見ると、アノ亀井戸(かめいど)の天神様の辺りに蝌蚪(おたまじやくし)とやらいふて蛙の胴中(どうなか)と尾でもつて木の枝や垣根へ幾(いくら)もはりさげて売(うり)それがアノ下(さげ)まできて無る蛙の中にもいろ〳〵な亀があつて我(さて)かしこくは天命の気まゝ

られて居るからハ、そこで我術に遁られませぬといふ事を
よく得心した亀ハ古い程年になるそうで首も出さず
かしらも出さず尾も出さず身をおさめやうか亀ハ万
年と云はれて首も手足も胴の中へヂツト引込で只
置て池の中へ放して下さらバそれハ遊楽てあの中
と自由自在にあそばるゝが。中には天命といふ事のある
事を知らぬ亀ハ我自力で遁れふとあげらちてゐる事の中から
不思入りから我かしこくハ虚空へ頭あげてありあるいハ首や手
足を長う伸してはちくを向てへがやくがやつき廻る亀
を人が見てハアヽおもしろいなものじやと思へけれどアノ亀の
くるしさハ堪らぬものでござりませぬでも今朝から
モウ二三里もはなれて来たやうに思ふたらハヤ水のある所へ
出さうなものじやに、あらぬハ所のまゝの事じや。何ともいへぬ
であらうぞや。しらぬと云ふ人であらう。それでアノ亀に似た事で
も虚空を相手に一しやうをがやつくほどハ首も手足もつか
れ果て殺しに人の来るも知らず寂滅して待して居る。そこで
人があのやうなものであがいてものがさぬがやけども
そとも天の網がかけりやだいてもぬかれぬ世界をすま中
をそれさへあるや自力でもぬける事の中には小人を
あのやうに険しきを知つて幸を求むと登られもせぬ

がけなどゝいふ程な所に登つて来て探てもあらぬことが又楽を探なしてひよつくりすれば富も出るすがたのじやといふて富の札を買ふてひよつとそれが当も儲るすがあるものじやといふて米市へかゝつてゐるひよつとそれが山も当るすがあるのじやといふてわるふくな熟するをたらんづりひよつとすれば用るすがあるのひよつとそれが熟く中のに探てもあるねひよつとを探て危ぶく思ふて居るものが多い。それが皆群集のやうにまでいふもので活く天命ゆへいへますを知らぬ小人のかなしさじや。そして又其の気

などはアノ蛛といふ虫が餌をとるのでも考へて見なされ。あちらの木の枝からこちらの木の枝へ一間二間づゝもあろふと思ふ所をなへ。大造な餌をとつてかゝりまする。アノ蛛は羽もなければ翼が飛でもゆくまいが。ひとすぢの糸をかけ渡しいざふして往かよつてゐるのであらふぞ。既によその蛛の餌をとるのをヂツト下から眼を附て見ますれば。誠に感心なするものでござりますじや。アノ蛛がそじの腰を張つて思ひのまゝがつがりとあらん限りの糸を十分あがり延して、カノ蜘蛛といふものゝ如くぶらさがつて下つて居るでござりますので

自身からぶらさがりの木の枝へ飛にても糸を結へても届はせぬじや。それがカノ君子は居易以俟命（くんしはやすきにゐてもつてめいをまつ）といふもので此糸を延（のべ）れだけのりが足るほどの所を十分に勤めてたるむつもりでそれから様（さまざ）の働（ちから）ぶりぬいて居天命の風にまかせさへして居るじや。さうすると何れからかうぞ天命の風が吹て来る由へその時その風にまかせて向ふの木の枝へチヨイと取付それからその糸を張つてあちらへ渡りこちらへ引ぱりしておのれが中に大造の巣をこしらへ。かうして扨を待て喰ふて居られる何とも不自由のないのじや

しかるに人もてうどおのれの勤をかへりみずただ家をたて大事くに十分に勤めもせいでその余計な事は何ぼ好みても天命の風にまかせずしておけばよいに。小人はさうせぬものじや。足を勝手の手代子供などのうちでいやいや勤め奉公に来て居る時の心持といふものも手すれどただ主人大事に奉公する其の一心不乱（いつしんふらん）で商売の道をも覚へて出家の勤めべき所を勤むる其の糸を伸ばすと十分にしてあとはいづれ後には天命の風が吹て来て布簾（のふれん）もらふて商遣入（ぐわう）に出来るにちがひのない其その勤めの糸を伸れる手は背をおもんでやくやくに勤めれば中ぐ

商賣の店をもおかゝへぬものがたゞや家を持ての女房を持たのとおりえまはるそれがかの切り株が末を伸しをるゝは少しばかり伸しておいて其向ふの木の枝へ接付ふしともかくせうぶものでも縦よふへ接つゐて変が後の末を引切て向ふへ接付くのじやから又向ふの木の株から仕直さずやどふしても接をとらねば出来ぬ。何と若い衆それでは済ぬものじやあれがむかしの若い者はえずあき出してまづ家業の店をおぼへそれから後に別家（べつけ）して家を持それから後に女房を持それから後に子を持てその家をお譲さんそれが世のその順（じゆん）にしてこそ正（たゞしき）と云ふもので段々とお接をなさつて中紀おめでたいものとおもへるが。今時の若いものはどふしても気がみぢかふてあつくとうふうの中から家業も覚へぬさきに家を持ふと志り家もあいさには女房持ふともがいてすぐしる遠ふくの女房もあいさには子から出来て難儀するもあるげな。いつそ後に出来てよい子がいつちさきへ出来るゆへまうことかれ初への女を女房にまうて家進に立ても店も出せぬからよんどころなく淡納屋の端（はし）か裏（うら）借家の隅（すみ）を借て家持ても渡世の店の何かも知らぬゆへ手持ぶうつりからくへ出して見れどさつぱりものでないから

こ女房ハお洒落して見てゐる女房も同じやうな話なし業(さる)でいづれも人の袖をたぐる者へ外思ひつかぬゆへ志ようするすれ(てア)紙屑買(かみくずかひ)か納春(ちやうまき)どもハ頬(ほう)かぶりどるして此(これ)絵馬しども貴あつくより外往やうが無い。それが(カノ)中の略系を切て荒ごのじやうな生涯難義ではなくやならぬあはれしうりやその町方の若い衆のすむだらうじやなんぞ一理万通(いちりばんつう)といふて士(さむらひ)でも農夫(ひやくしやう)でも醫者(いしや)でも出家でも道理ハ皆一ツ道理なるによつて人ハ其我なぬ知く務く天命といふ事を知りその天命の分にそむかぬ中う今日を大事にしておれ勝手がすまぬ事じや。

さうなればとてしても此世ハ只すがりがなくての自力でゆけるものでハなひ所がやすからぬ若いうちからふてうの衆生の職人餘所(よそ)にして博奕(ばくち)をならお話しもうす人に欺(じき)してあのれが身へ利を得る事考へてうる人のものを盗みなどしてもおのれがまゝ身の只あげくは志まうと悪くなりみなん若者などでハ恐い友達と附合ても悪ひあそびのまねを悪くなり立欵の眼を盗んでハ不宿遠へ遊女(ゆうぢよ)ぐるひさせる皆あぶなひ事の天上で厳禁の事じやゆへいづれも仕舞ハ身を投(すて)るか首をくゝるか相対死(しんじう)させるか。よしそれほどにせずとも大病するか分散するか勘当(かんどう)にあふか家財を出すか身を落されるか

眼を潰されるのがいやさにいろ〳〵に廻り道をせうや
しれぬが。その時はなんとして何とせう事も天命じやとしく
天命といふものはなさけあるものじやなぞと思ふから
なしれた遠地獄又は菩薩も知らず天道様とうらみをり
人の身のうへとうらやんだり又遠い田舎などの衆生
願ひの今生恥といふものがなければ此世はまづ此境界
なまじひにやつぱり殊するのやうに思ひ。欲ふ居ましてし足
人をかい居忠をし夫婦げんかさしたり身いろひ審文するやく
人をたぶらかしやら家嘆をさせやら悩変をさせやら又いろ
しくな工夫をたくんで。よく〳〵地獄苦労をするやうなる

ある人の頭へ縄をさしてはその上をしを上げして
かけくの上で手は縛りまたり擲かまたり肆まわり
首切られたりそれを見るは極楽して死ぬる者といふ
てゐるが。極楽は足がせのない楽は手がせのないのじやが、
そのやうな足がせや手がせの苦しみを受けて死ぬるの
その正命の天命といふものではない。正命に非ずといふ
ておかれたが。それとやつぱり我自力でこしらへることと
なるのだ。そのやうな手がせや足がせの苦しみを身すり
引まく時に何とかのふぞといつとやせしておもへば此やう
に思ひつめではなりてさらに備へいるすそして何と

せぬ覚も過去生の因縁(いんゑん)ずじやの何ほども業ならぬ
は絡まじやのといつて居るが何のそのやうな悪(あく)しん
は絡まりして生れるものが仏の世界にあるものか
へまじとかぎりし身が狂秋なからいが身にへて苦(く)をする
御上からかうぞ此身をへらもちるやうなすしてくれな
よ此早縄(はやなは)で縛しまるやうなすしてくれなよそのくあ
まる人へ此やうに出してかざつて見せて欲ぞよ影ぞよ
くして仰らでは何で五奴の玄関や縣園(けんで)の老の出
張く家らはいつでもアノ子金や早縄や鐵尺(しつてい)ちゆん
と並て見せてあるのじやよそれよくちうう出よく

縛(しば)て　ハイ　さやうでは御ざりませうがどうぞ此子へ少しの間
は入なされて下さりませ。それは此子がなくとまて居りませぬから
と惣角盗が仕ふへならつて博奕が打もつなりませぬから
お世話しぬ中へ御郷アでは御ざりませぬが少しの間どうぞ
ようしよ御ざりまする御入なされてやさりやませ。又御縛り
なさつてやさつてもどふぞふんぶしよふ御ざりますまや。
我子を銭と擬して行く文字で子を守りちぢくへくり
して出るものじやから。走まつてさへしれぬかし（マア）
覗(のぞ)きの通りに来てやろへと子金をは入なされたり又
早縄では縛りなさるのじや

早滝のかゝる恵(めぐみ)のおゑが下さるゝれぬやう只実貞(じつてい)にせよものゝるの実貞にさへしておれば。此世も後の世も何も怖(こは)がることも恐(おそ)ろしいこともありはせぬのじやよ。よくその実貞なるのは嫌(いや)がつて何此経のうちは世間並のものじややうによう思ふれの此ころの嘘(うそ)は人を誑くるのじや。やうに勝手ならぬの此経の論(さた)りんよくの此経の慈経は親づらひあひのとおりひく此世から未来永々の地獄の釜(かま)ゆげになつた五躰中に柱おつる手まへてまゝてそのじや。それでその中から後生願ひで佛法でも蛤(はまぐり)田螺(たにし)といひやすまいげな。なぜさうならぬあるまいがアノ蜆(なぞ)に至る蛤やいへものは元来海の底へ生れつきのもので海の底が好じやが天命のあるあひだはいつまでもその海の底の泥(どろ)の中に潜く貝とひそんで棲(すん)でおりますへそれだから何のやうに漁人(りやうし)にもうち網らまへてられもする事もあいふもありますいに潮(しほ)瀬(せ)の干潟(かた)残(よ)されツイうかしと干潟(ひがた)へよう浅瀬(あさせ)の砂(すな)の中から掘(ほら)れ鍛錬の主にうかりしあおるうツイ漁人にみえ捕られ貝殻(かひがら)へ引かけられてあまつて売(うり)ましてそへまゐるとその蛤ばいづれどうぞの釜の中か鍋(なべ)の中へ入られて煮(に)られるか知れぬさるすじやがさうなるとその蛤はもうお干潟で殺人すえ捕られも貝殻へかゝつて蛤が藻(もう)どうぞの地獄の釜へのられて煮られまへとのその頼み事をすめつくのよ遠(とほ)くは無

あゝ（アノ）蛤のうらるゝのを人間の眼から見て居るとヤレ不便（ふびん）や此の蛤を貝売へ引うけられさと又その蛤もかつゝと殻よされる段〻手まとすける中に思ひけれど蛤はそのかくるゝを知らずも亦のほゞ浮（ウカ）〻とかつては篭（かご）の中へ入れ貝売の手へ渡さるゝと貝売が市中（まちなか）を蛤よし〳〵とふれて売りあるくその売声（うりごゑ）を人間の耳へ容易（ヨウイ）蛤じや〳〵此蛤をどこぞの釜へ入て煮や去年うぬかどうぞ〳〵此蛤を煮る地獄の釜を遁さぬかといふて是（それ）をきするのじやよ。蛤は中〳〵そう浮（ウカ）〻でおりとてめづらしき籠へのせて土手（どて）へやら流まて漂ある所でも是は珍しうないはずじやそして又市中は物の中と〳〵ならひ違ひで違ふるあんなうなやうなものじやぞでも是は薬やへどうも何そびに活まて生れあらうよあんどうらへ行く猪（きざみ）で是（チウ）〳〵と潮（しほ）を吹かるうちぞくらの夫ならな茶屋の九世へおかそれると茶屋の料理人がなん〳〵（ジヤ）是はめづらしいよいすな蛤茶屋は鐵なぞといふとハイ幾らで上ませふ（ヨ）てそんならそれでよし〳〵と相続のまゝくる貝が（モウ）その蛤はよし此方の内の地獄の釜で煮させふ。あゝしバさ中うあさうりうせと相続のなさるくのしやよ中ぞろ蛤はそれとも思ふに

桶の中へ入られて水を入らるると ハア是は又気のある所へ出てきてぞうらんしくとよろこびおるうち料理人が洗ひかけて鍋の中へ入出給へばむし給まさるがよかろふと気を少し入て上から塩をパラ〳〵とふりかけると蛤はよい気になつてや 是は又潮がみちて来た〳〵 モウ〳〵此方の世界になつてきたさしく嬉しや心地よやと我も〳〵時は モウ鍋の下に薪がくべて火がボロ〳〵ともえあがるうち貝へたつ〳〵今ハラ〳〵と気へよるか熱くなつてくるすじやまそれに蛤をマダ〳〵ウカ〳〵しでうるやぐ中から中からう暖うになつてくるがあまでもあつてそれへチト見えまずも知らけ

よふチユウしといひおるうちツイ〳〵と気へ上るにその時にあつて蛤が死ぬるに大きな口をあけてヤレ〳〵かなしや苦しや今此中から月に逢すとあちつとおに気がつかぬ。そふしてみがけの仕やうも皆つまるに。ならされあいてもしたとぞのやうに歎いても悔んでも続かぬといふ後の祭りぞの中にも仕やうがあひ先年ある人の不審にも若き女がかつて実の夫を姦夫と云ひ合せ已に殺さんとゐくまして居たが露顕により終に御上へ召捕られ此時宿の上者人とも死罪に行はれけるが其の死罪に行はるゝ時右人がくる馬へ乗てその両の手を牽出し

成敗場（せいばいば）へつれて往て与人ともろかゝあらし已に殺すあるといふ事はむかしの与休息させずんば変その時カノ女が釜へ仰ていひすれはまことにえかしら他のやうにするまではあのこゝろがお前（まへ）が此方（こち）の人の首〳〵事ては いろ〳〵あるのをいひかけさ志ゆうら ツイ こゝしもその ことはあつて今月此中ら月に逢中れはといふて居らふ 釜まへ恨（うら）みといふさけなかが行と決まらぬものじやなれ ろそのとしめはいらしくあるまいひらけさ時ガカノ給の人 かたきへ引かけられる迄で地獄の釜へは給来のきまる所 じやうさ おそろしやと迎もべよふにその時はあのれ

もまろんでかつ〳〵あつ〳〵鍋の中で上へ上る時にあつ〳〵そのやうな悔（くやし）でも罪業（ざいごう）はひ逃べくとて ソリヤ モウ 地獄の釜の中から念佛いひあるのが間に合ぬそれに又今の女があゝ乗（のせ）られて牽れて時にはあの珠數を持せてとゞしんにては南無阿彌陀佛〳〵といひしく牽かるれ 遂てげなが行く事の毒なものじやあれが往生所へといふても家安（わうやうそうや）く往生所へものはこんな此やうなものじや（ろんまへ）の心雅枝は疾（し）く處（きう）て モウ 地獄の釜へ迄て仕まふく ろゝその泥のぬけがらを所上の心悪業で牽まるゝさせ 諸人へ心ろんせあさるのじや ふそれとも忍しばやすく仏に

ばつかりじや扨〻釜の中から念仏となへるとあるそれなものじやなんと御上ハ地獄の大慈大悲（だいじだいひ）じやそれに何ぞや我儘をせうと思ふ人〻の為に西楽に苦て居る地獄の人の首をはねるに一切なさるものを。よう（マア）考へてごらうじませそれでそのやうに後の世をたのミにまするばつかりで此世の為をおろそかにしくさり来年とあて申して今年と意（こゝろ）くつするものを皆仏法でも輪廻といひすればげんざいへぞ此世にて此をねがりはれふあしぬ世の膝（つし）に結べあしぬるまで此ぞりゆすれ

下の巻へつゞく